

平成26年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属幼稚園

1 附属幼稚園の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属幼稚園

(2) 所在地

大阪府大阪市平野区流町2-1-79

(3) 学級数・収容定員

6級(1学年2級) 収容定員150人 (1学級30人 ただし3歳児は16人と14人)

(4) 幼児・児童・生徒数

147人 (男児73人 女児74人)

(5) 教職員数

園長(併任) 1人, 副園長1人, 主幹教諭 1人, 教諭 6人, 養護教諭1人, 非常勤講師 2人
事務職員 1人, 臨時用務員1人,
栄養士1人, 調理師1人

2 附属幼稚園の特徴

本園は、都会の中にありながら、豊かな自然環境の中で身近な人々とのあたたかい触れ合いや、生き物たちとの日々のかかわりを通して、やさしく、あたたかく、思いやる心が育つことを願っている。

幼稚園生活の主人公は幼児であり、幼児の思いや願いを大切にしたい生活を心がけている。幼児は遊びを通して様々なことを学んでいる。遊びこそが幼児の生活そのものであり、今日の幼児の姿から明日の生活がつくり出されていく。常に幼児の今の姿を出発点として、個々の育ちや発達の状態、その時期にふさわしい遊び(生活)が展開されていくよう、努めている。

また、昭和23年より保護者手作り給食を実施しており、60年間にわたって受け継がれている。子ども達に手作りの温かいものを食べさせてあげたいという願いと共に、食の安全や衛生、アレルギー対応など、時代の変化に応じた給食作りを目指している。

3 附属幼稚園の役割

- (1) 学校教育法に基づく幼稚園教育を行う。
- (2) 幼稚園教育の理論と実践に関する研究を行う。
- (3) 本学学生の教育実習を行い、その指導を行う。
- (4) 地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

4 附属幼稚園の学校教育目標

「すこやかに あたたかく 遊びに生きる子ども」

- 3歳児・・・喜んで幼稚園へ来る子ども

生後わずか3年しかたっていない子どもであるが、一人の人間としてすばらしい力を持ち、一人一人がそのらしさを秘めている時期である。この1年をゆったりと大好きな先生に寄り添い、自分の好きな遊びに没頭し、明日も大好きな幼稚園に行こうと思うことが、これからの保育年限における健やかな育ちを期待する上で何よりも大切なことであると考え。

○ 4歳児・・・友達を見つけて、幼稚園の生活を楽しむ子ども

友達の存在に心を揺り動かし、幼稚園では「いろいろな友達がいる」「一人より友達と一緒に生活が楽しい」「友達とかかわり合って育つ」等の体験をしながら、幼稚園生活の楽しさを味わい、思う存分遊ぶ子どもに育つことを願っている。

○ 5歳児・・・友達と心を通わせ、様々な生活に熱中する子ども

心身ともにたくましく、知的好奇心もぐんと増す時期である。試行錯誤を繰り返しながら全力で幼稚園の様々な生活に熱中し、一人でも、みんなとでも「やったね」という成就感を味わい、友達と力を合わせて楽しい園生活をつくり出す子どもに育つことを願っている。

5 附属幼稚園の学校教育計画

1 人間尊重の教育

幼児一人一人の人権を守り、将来豊かな心で、生きる喜びを感じ、差別を克服し、困難に立ち向かう、しなやかな心と体をもった人間の育成に努める。

2 基本的な生活習慣の形成

幼児の行動を見守りながら、必要な時期に教師自身がモデルとなって援助したり励ましたりしながら、幼児が園生活にとって必要な行動であることを自覚し、自ら身に付けていくことを願っている。

3 規範意識の芽生え

園生活の中で、自分以外の友達や身近な人とのかかわりを通して他人の存在に気付き相手の尊重する気持ちを育てることから始まると考える。また、園内の豊かな自然環境や飼育動物との共生の中で、思いやりや責任感など人間性の根幹にふれる体験を大切にしよう努めている。

4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得

幼児の生活が、より楽しく、より便利に、より心地良く、より目的に向かって充実するために必要な遊具や用具がある。これらの扱いを幼児自身が必要と感じた時に逃さず身に付けていくことと、3年ないし2年間の園生活の中で出会うことができるよう、指導計画の中に位置づけることとしている。

6 附属幼稚園の平成25年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	1 人間尊重の教育 研究主題「『きく力』を育てる ～人の思いを感じられる子どもをめざして～」のもとに、教育活動を構築し幼児のきく力を育むと共に、一人一人の発達を保障する。保護者にとって学びの機会をつくり、幼児の育ちの姿をどのように捉え、支えるかを共通理解する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)「人の思いを感じられる」とはどのようなことか、「人の思いを感じられる子ども」に育つためにはどのような力が必要であるかを学ぶ。また次の実践にいかす。	園内研修会を年6回、保育研究会を2回実施し、実際の子どもの姿から「人の思いを感じる子ども」の姿を教師間で共通認識する。 また、文献から人に思いを寄せていく時の幼児の内面の変化について学ぶ。	園内研修会や保育研究会での幼児の姿や実践事例の検討、さらに文献から「人の思いを感じる子ども」の姿を共通認識できた。また、その折に大学の先生から助言いただくことで「人の思いを感じる子ども」を育てるために必要な体験について共通理解したり、幼児の内面の育ちを導き出したりできた。	今年度導き出した「人の思いを感じる子ども」を育てるために必要な体験ができるより望ましい環境構成と教師の援助について考え、次年度は研究のまとめを行なっていく。	A	「話す」「きく」ということは人間性を育むことにつながっている。まずは子どもが思いを出しているということが大切である。「きく力」はこれから成長していくうえで人と接する大切な力である。教師の子どもを見取る力が大切であるので、理論と実践が繋がることを期待する。	A	来年度は3年次のまとめとなる。理論と実践が繋がるように教師の子どもの姿を見取る力をつけていきたい。そのために、園内研修会の充実を図り、年度当初から大学の先生から助言をいただきながら研究を進めたい。
(2)保護者の保育参加を行い、幼児と共に遊びにやりながら、幼児理解を深かめる。	各クラスに3、4名ずつの保護者が、登園時から保育の中に入り、幼児と一緒に遊びながら生活を共にす	参観とは違い、保護者も仲間となって遊ぶことで、子どもの気持ちや楽しさを感じることができた。今年度は遠足、避難訓練などの行事にも参加していただくこ	保育参加の時間幅を広げたり、参加の場面を多様にしていく等の工夫をしていきたい。また、参加後の話し合いのポイントを整理してい	A	保護者の幼児理解・教育活動の理解に繋がっている。いろいろな行事に参加してもらうことが有効的である。今後、父親も参加	A	日常の保育のみならず、遠足などさまざまな園行事に保育参加日を設定していきたい。また、来年度は休日に保育参観・参加日を設

	る。また、保育参加後に一緒に生活した中で気付いたことや疑問点を意見交換する。	とで、子ども達の安全についても話し合うことができた。	きたい。		しやすいように土曜日などに保育参加を行なってはどうか。		けるようにする。
--	--	----------------------------	------	--	-----------------------------	--	----------

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	2 基本的な生活習慣の形成 食に対して興味・関心を持ち、進んで食べようという気持ちをもつ。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)食に関心を持ち、喜んで食べる子どもを育てる。	園でできる果樹に興味をもったり、自分達で野菜を育てたりすることにより食べ物に関心をもてるようにする。 保護者手作り給食のメニューの改善を図り、子ども達が食べる喜びを味わえるようにする。	園でできる果樹や野菜については、自分達で育てたりその生長過程を楽しみにしたりすることで、食べる意欲へ繋がった。 給食のメニューは栄養士・保護者・教師がともに話し合う機会を設けることで、より子ども達が喜んで食べる姿へと繋がった。また、子ども達にもメニューについてのアンケートを行なうなどして関心をもてるようにした。	保育の中で、食に関する活動をどのように取り入れられるかさらに検討し、子どもが食への関心をさらに高め、感謝の気持ちをもてるように育てていきたい。	A	活動報告の中に子ども達が野菜を収穫している写真があったが、自分達が育てたものを食べるという経験は大切である。附属幼稚園の自然を活かし、食への関心を高めていくことが大切ではないか。	A	園内にできる果樹や子ども達が育てた野菜を、給食のメニューの中にさらに活用していきたい。また、保護者との連携も深め、給食のメニュー改善に取り組んでいきたい。

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	3 規範意識の芽生え 幼稚園生活の約束を知り、守ろうとする気持ちを育てる。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)友達と一緒に、心地よく生活するために、約束があることを知り、守って生活する大切さに気付く。	<p>ルールを守って遊ぶことで、その遊びがより楽しくなるような遊びの提示をしたり、教師も一緒に遊びながら幼児とともに話したり考えたりする場を大切にしている。</p> <p>また、日常生活の中で、みんなが気持ちよく過ごせるためにマナーがあることを伝え、教師が自らの姿で示しながら、マナーを意識した幼児の姿を見逃さずに認めていくなどの働きかけをしながら、身についていくよう努めた。</p>	<p>年長児においては、ルールを巡るの幼児同士の思いの伝え合いを大事にし、その様子を見守りながら必要な援助を行っていった。</p> <p>年中・少児も教師や友達とのかわり、さらに登降園の機会を通して、約束やマナーがあること、それらを大切にすることを学んでいる。</p>	<p>教師が教えてしまうのではなく、幼児が気付くことを大切に、時間と気持ちにゆとりをもってかかわっていききたい。</p> <p>さらに生活の中の様々な場面で、教師自身や保護者などの大人が約束を守り、マナーを大切に生活することが、幼児への最も大切な指導となることを、心に留め実践していく。</p>	A	<p>大人がまず見本となつて約束を守っていくことは、とても大切なことである。子ども達は大人の行動をよく見ている。</p> <p>子ども達が自分達でルールをつくったりルールを巡って話し合えたりするような時間が大切ではないか。これも研究のきく力が育つことに繋がる。</p>	A	<p>子ども達が相手の話をきく、気持ちを感じる事が約束を守ろうとする気持ちに繋がることを改めて感じた。子ども達が自分達で気付きあったり話し合ったりする時間の余裕をもてるよう、日々の保育で心がけたい。また、大人が見本となっていくことは、保護者とも連携を取りながら行なっていきたい。</p>

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得 園生活の中で必要な道具や遊具と出会い、見たり、実際に使ったりする経験を重ねていく。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)遊びがより楽しく、充実していくよう、幼児の必要感に合わせて遊具や道具を提示し、経験を広げていく。 同時に、安全で正しい扱い方や大切に扱うことなどを知り、その態度を身に付けていく。	幼児の発達にあった、遊具や道具についての教材研究を深め、準備を進めながら、タイミングを逃さず投げかけるよう配慮する。また、その扱いは教師がモデルとなるよう心がけていく。	生活の中で必要な遊具や道具が、丁寧に準備され、環境が充実していった。そのことにより、幼児の経験が広がり、生活の中に取り込み、遊具・道具が活かされる様子がみられた。 一方、道具の扱いを経験させた思いが先走り、幼児の必要感を待たずに教師が用意してしまうこともあった。	教師が先を見通しながら必要な時を逃さないよう、環境を準備することに努める。遊具・道具の精選と、幼児にわかりやすい管理の方法など、発達に合った環境構成を工夫していく。引き続き幼児が生活を豊かにし、あらたな気づきや、経験の広がりに繋がる遊具、用具の開発に努める。	B	それほど完全に環境を用意しなくても、子どもは道具や遊具がないなら、その中で工夫して遊ぶようになるのではないかと。時には遊具・道具が不十分であるということも必要ではないかと。	A	教師が先を見通すことは大切であるが、環境が十分であるということは必ずしも子ども達の意欲を高めたり創造力を高めたりするわけではないということに気付いた。しかし、安全面に対する配慮や年齢の発達に合わせた環境は大切であるので、今後も子ども達の目線で環境を整えていきたい。

